

柳田 泉 著

『明治初期の文学思想』上・下

畑 実

二年程前に柳田泉先生の著作目録を友人達と作ったことがある。その時先生が雑誌その他に実に老大な数の論文を発表なさっておられることをあらためて知り驚嘆したのであった。しかも二段組三十八頁にわたるその目録はただ明治文学のことに限らず古今東西の文学・思想の問題にわたっている。その広さと深さの前にこれが本当の学問なのかと云うことをつくづく思い知らされたのであった。その先生の学問の現段階におけるまとめとして「明治文学研究」全巻十一冊が刊行されている。今ここにとり上げようとしている大著『明治初期の文学思想上・下』（第四巻・第六巻）もその中の一つである。「明治文学研究」はこの他先に第一巻『若き坪内逍遙』と第五巻『明治初期翻訳文学の研究』が出で、またごく最近に第二巻の『小説神髓』研究』が世に送られた。それについて『政治小説研究』三冊が近く出版されると聞く。

さて『明治初期の文学思想』を先に私は大著と述べたが、まさ

しく大著である。上巻四百八十二頁、下巻四百四十四頁で合計すると九百二十六頁になり、四百字詰の原稿用紙になおすと優に二千枚を越す分量である。この著の上巻の月報によると、先生がこの研究の案を立てられたのは戦争中であつたと云う。その案と資料の写し、そのリストを書きつけたメモ帳を疎開しておかれたので幸いにそれが戦火を免かれて残り、戦後先生はそれをもとに大学で講義をされ、その大体をまとめられたのが本書であるとのことだ。そうすると、最初に案をたてられてから三十年以上を経て完成されたことになる。

本書は明治十八年『小説神髓』が出現するまでの文学思潮の流れを解明しているが、第一部「序篇」第二部「初期文学革新の大勢」第三部「初期の文学思想」の三つに分かれている。更にこれを大きく別れば第一部第二部が総論であり、第三部はその総論の土台となっている各論と云うことになる。第一部第二部では明治以前には武士・インテリのための上の文学と町人や婦女子のための下の文学があり、上の文学が下の文学を抑える形で動いてきたが、明治維新後に西洋文化の移入などにより、上下の差が次第に平均され文学がほぼ一つの範囲のものとなった。しかし目的によって大小の差があり、大きい文学は広い意味での学問、サイエンス、実学の意味をもったもの、これに対して小さい文学は風流の要素をもったもので、大局から眺めると大きい文学の中に小さい文学は包括されてしまうような形であつた。しかしそれが西洋文学、美術思想、哲学思想などの影響で離れるものは離れ、合するものは合してやがて学問、文学というものを形づくる。その過程

が説明されている。その場合、第一部では序篇として明治初期文学革新の原因、その背後の明治文化の特色等の概観が述べられ、第二部は二篇に分け、その各篇を更に細かく分けながら、第一篇で明治初めから十二、三年に及ぶ上下文学の大勢を、第二篇では明治初めから十七、八年までの西洋文学の移入と同時に日本文学への影響、第三篇では十三、四年から十七、八年までの上下文学の変化と西洋文学の影響がどう絡んでどういうものにしたかが語られている。このあたりまでの骨組みは私どもは大学で直接先生からお話をうかがっており、なつかしい気持ちで拝見した。

しかし、この書物の本当のポイントは第三部にある。第三部のはじめのところで先生は文学思想文学革新の動きの研究と云う点では同じであるが、「第二部とちがって、文学思想に貢献した文学者、乃至著述翻訳などを中心に研究を進めていくことになる」と述べられ、「この第三部は大勢（注・第一部、第二部）を書き上げるにつかった原材の研究の公開である」と語っておられる。それだけにこの第三部は書物全体の三分の二以上を占めている。まさしく「初期文学思想研究の堂奥に上る道をたどる」感じがする。この第三部も第一篇の「明治十年以前の文学思想」第二篇の「明治十年以後の文学思想」とに分かれている。そして第一篇では福沢諭吉、中村正直、西周、福地桜痴、成島柳北、服部撫松が扱われ、第二篇ではまず日本文学の本体を把握するために文学の歴史的研究をし、ついで末広鉄腸、井上哲次郎、有賀長雄らの文学（広い意味）論をながめ、更に批評文学、美術の様子、美術思想移入の状況を論じて詩歌思想、詩歌の革新から小説革新まで統

けておられる。そうしてこれらが相まって『小説神髓』の出現をうながすところで終る。だから一応この著書は『小説神髓』前史と云う面を持っているわけである。そのことは下巻の終りのところで先生御自身が『明治初期の文学思想』はここに終るが、これから直ちに坪内逍遙の『小説神髓』の研究につながる」と述べられ、つづいて『明治初期の文学思想』は始めから『小説神髓』研究のための前駆的著作として書かれたものではないが、『神髓』研究が出来れば自然そういう立場で見られるかとも思う」と云われているのもわかる。しかもその含みは各所にのぞかれるように思う。すなわち「ヘーゲル哲学への理解」の項でヘーゲル哲学を逍遙も耳にしたことであろうと云われたのにつづけて「その辺のことも或いは『小説神髓』を読むときに必要な予備知識の一つとはならぬものでもなからう」と述べられているし、「フェノロサ『美術真説』」の項でも「美術論でもあり、美学説でもあるが、同時に坪内逍遙の『小説神髓』の資料の一つであるという点で、それだけ多く注意をひくものである」と云っておられる。また「坪内逍遙の小説美術論」の（一）から（四）までは『小説神髓』に直接つながっていくものだし、その他にも「バイン『心理新説』」「スペンサーの進化哲学と美学思想」の中にも「神髓」に触れた箇所が見える。この著書の後半においては『神髓』を常に頭に置かれて筆を執っておられたことが解る。

それにしてもこの第三部は明治初期の文学についての智識の宝庫である。氷山は海面から出ている部分より下に隠れている部分の方がはるかに大きいと云われるが、第一部第二部を頭に置くと

きこれはまさしく氷山の下の部分と思わせるものがある。私の無

学がわかってしまつて恥かしい至りであるが次々に展開されてくる事項はその殆んどが新しい智識なのでまことに驚嘆しながら読みつづけたのが実状であつた。恐らくわれわれ同一世代のもので、この中に登場してくる事項のうち半数をすでに知つていたと云うものはその数多くいないであらう。そのうちでも「日本教育史略」が形の変つた文学史であること、「小学雜誌」のこと、馬場辰猪とクーパーの啓蒙的演説のこと、浅野乾、坂崎柴瀾の小説論のこと、田口卯吉や末松謙澄の評価のことなど、お教えを受けたことは沢山あつて、上げていつたら枚挙に暇があるまい。しかしこのような十年代の複雑な文学思想の問題は先生だからこそ整理をうまくつけられたのだと思わせるところがある。先に私は先生の学問は古今東西にわたると云うことを述べたが、明治初期のものは漢学と洋学との素養がなくてはなかなか説きこなせるものがあるまい。論文文中に取り上げられているもので原文が漢文のものが数多く出てくるし、また翻訳なども不備なものが沢山あるわけである。そのためには漢文がよく読めなくてはならず、同時に外国語がよく出来なくては駄目だ。先生は翻訳などは原文と一つ一つ対照しておられるようである。このことは「中江兆民訳『維氏美学』」の項で、同じ箇所を兆民訳と御自分の訳と対比せられて兆民訳の正確ではあるが冗漫な点を指摘しておられるところとか、「百科全書『修辭及華文』」のところで「原文を早稲田の勝俣銓吉郎先生から借覽して、訳文と対校した記録をとつてあつたが」と語っておられるところからも察せられる。なかなか生半可

な学問では真似が出来まい。

このように次から次へと新智識が登場し、その応接に暇がないと云うのではさぞこの書物は読みづらいだらうと考えるが、決してそのような感を与えない。至つてすらすらと読める。それは事項の整理がきちんとついていることと、柳田先生独自の書き方がなされているからではないかと思う。難かしいことを誰れにでも理解出来るように書くことは大変至難なこととされている。浜田青陵博士の書かれた『考古学入門』と云う本を私は十代の終りに読んだが解りやすく大変面白かつた。しかし、その後浜田博士のことを書いた本の中で博士がこれまで書かれた本の中で一番苦勞されたのは何かと聞かれた時に「『考古学入門』である」と答へられたという話を読んだ記憶がある。柳田先生はその至難なことをごく普通になさる方ではないかと思う。かつて私は先生の仕事のお手伝いとして口述筆記を少しやったことがあるが、先生がメモを御覧になりながらすらすらと話されることが、そのまま文章にきちんとするので驚いたことがある。この方法がここに用いられているわけで、先生のお話をうかがっているような調子で読みすすんでいけるわけだ。それに原文が漢文で書かれているところはわかりやすい文章に書きかえられ、また「森田思軒の小説論」のところでは、『経国美談』後篇に書いた思軒の跋文が原文の漢文のままで掲げられているが、これにはわかりやすく注が付けられると云うような配慮がある。しかも例えば「大新聞、小新聞の出現」の項で「私どもの出入した明治文化研究会の故老の中にも平気でダイシンブンといつていた人々がいたことを記憶してい

る」とか、「ロシア美学瞥見」のところで、ウィリアム・ナイットの「美の哲学」を手にしたのは「大学時代、長谷川天溪にすめられたからであった。長い昔であるが先生の恩恵はいつ役に立つことになるかわからないもので、まことに有難いと思っている」と御自分の体験を挿入されたり、「三木愛花の文学論」のところで、かれの文学論の項目が大げさなので「読者は驚愕の氣を禁じ得ないのであるが、なに読んでみると、泰山鳴動して何とやらの感じで、一向驚くに当たらない。今つっしんで大意を語るとしよう」というようなユーモアに満ちた書き方をされていたりして時に肩の凝りをほぐすようにと云う考えもめぐらされている。

さて、くり返して云うようだが、まことに実証的網羅的なこの第三部には圧倒される。読みながら学問のきびしさと云うものをひしひしと感じ、自分の無学をいやと云う程知らされるし、同時にもうやる事がないのではないかと云う気すらして来る。しかしその点のことも先生は考えておられるようだ。例えば「西洋文学移入」の項の「移入条件の追補」で初期文学界、文学革新時代に慶応義塾の役割は大きいのにあまり問題にされない。このテーマをもっと詳しく調べて不動のものにするのはこれからのテーマであると語られ、「若い研究家の奮起をのぞみたい」と云っておられるし、「百科全書『修辭及華文』」の項でも「この修辭論・文章論のところはその方を専門に志す人々が改めてやる必要がある」と云われ、「西洋小説への興味」では「読者の中で有志の人があったら、こうして翻訳の序文が緒言かで西洋小説に対する興味なり尊重なりをひろって整理してみられるがよい。面白い結果

が得られると思う」というようにいくつかの研究テーマのヒントを与えて下さっている。

かつて大学で土岐善磨博士から『古事記伝』の講読をうかがった時に、博士から『古事記伝』の中には宣長の学問に対するはげしい情熱がこめられている。その点でそれに触れるために専門外の人でも読む必要があると云うお話をうかがったことがある。私はこの著書に『古事記伝』に感ずると同様なものを感じる。先生の学問・真理に対する情熱のようなものを感じる。私はこの書物から学問の方法なり、文献の扱い方なりいろいろなことを教わったが、同時にそれらを越えた先生の情熱に感動させられた。それが私どもの心の中にある同じもの、ともすれば睡りがちな同じものに火を点じ呼びさましてくれるのだ。この書物は怠惰な心をはげまし、勇気づける不思議な力がある。

この大著の紹介を書くかと思ひながら、何かまとまらないものになった。浅学の私には先生の著書の批評をすることなどとても出来ない。もし批評でもしたらそれこそこの書物中『絵入自由』の批評論論』の中で紹介されている悪い批評は害を及ぼすの好例になってしまうかもしれない。

(上巻昭和四十年三月、下巻昭和四十年七月、A5 春秋社刊)